

編集後記

『親鸞教学』八九号を皆様にお届け致します。お忙しい中、原稿をお寄せ下さいました方々にお礼申し上げます。また、発刊が遅れましたことお詫び申し上げます。

巻頭の藤嶽明信先生の「報土の往生」は、善導大師・法然上人より伝承された凡夫人報の教え、すなわち凡夫が報土に往生するという教説を聖教の上に確かめ、さらに私たち凡夫のために開かれた浄土の教えが、親鸞聖人にどのように領受されたかについて、その教学としての意義を考察した論文です。

山田恵文先生の「『三毒五悪段』考——『大阿弥陀経』と『大無量寿経』における位置を通して——」は、『大無量寿経』下巻に置かれている「三毒五悪段」の意義とこの段に対する親鸞聖人の眼差しについて綿密に考証した論文です。

任期制助手の藤元雅文氏の「親鸞における一仏乗開顕の視座——法然と、貞慶・良遍を通して——」は、親鸞聖人の誓願一仏乗の指教の開顕の意義について、当時の仏教界の歴史的背景から論考した気鋭

の論文です。

水島見一先生の「昭和初期の仏者たち——興法学園——」は、前号に引き続きものです。曾我量深・金子大栄両師を仰ぐ学生らによって鹿ヶ谷に開設された興法学園は、近代の信仰運動に大きな足跡を残しましたが、本稿は、興法学園の歴史的意義を現代的視点から振り返って論じたものです。

今号は、以上の論文が五本と、恒例の安田理深先生、金子大栄先生の連続講義によって構成されています。金子先生の「第三の人生観」は今号を以て終了となります。なお、今号掲載の講義録の口付が不明となっております。ご存じの方がおられましたら、当学会編集部までご一報ください。

それぞれの論文を拝読しながら、『大無量寿経』を起点として、善導・法然から親鸞まで、そして親鸞から近代そして現代まで、と脈々と続く教法の伝承ということを想わずにはおられません。伝承と己証ということが言われますが、浄土真宗の信仰とは、伝承されてきた教法を自らの上に己証するということ以外には

ありません。真宗の歴史は、伝承と己証の連続無窮の展開であったと申せましよう。

曾我・金子両師の「異安心」事件が近い例として想い起こされることですが、浄土真宗の信仰が私たちの手に届くまで、一体どれほどの苦難の歴史があったかと瞑目沈思せずにはられません。

昨年来、「ご流罪八百年」というテーマでいくつかの催しが開かれています。あの承元の法難では、法然上人以下七人が流罪、四人が死罪になりました。そのような苦難と受難の中に親鸞聖人は『教行信証』を執筆されたのです。真宗の学びをいま実践することの重さを身に感ずることです。

(文責 安岳)